

綿貫観音山古墳と朝鮮半島

The Watanuki Kannonyama Mound and the Korean Peninsula

右島和夫

MIGISHIMA Kazuo

はじめに

- ① 観音山古墳石室の基礎的整理
- ② 角閃石安山岩削石積石室と観音山古墳
- ③ 観音山古墳石室の系譜と成立過程

おわりに

【論文要旨】

群馬県高崎市の綿貫観音山古墳は、6世紀後半の関東地方を代表する前方後円墳であり、全国的にも著名である。昭和43年からの一連の発掘調査で、後円部の横穴式石室から手つかず状態の豪華で豊富な副葬品が出土した。その内容は、朝鮮半島（取り分け南部の百済・新羅・加耶地域）との深い関係性が窺われ、極めて高い制作技術による優品群である。本墳の被葬者、関係者の人物像として朝鮮半島との深いつながりが想起される。

石室内の副葬品には、大いに関心が寄せられてきたが、一方でそれらが納められていた横穴式石室については、構造的特徴を明らかにするところまでに止まり、系譜的關係や築造背景について検討される機会は少なかった。本稿では、このことを中心的課題とする。

観音山古墳の横穴式石室は、上毛野地域で5世紀末葉～6世紀初頭から始まる横穴式石室の変遷過程の中にあって、断絶性・異質性が顕著である。6世紀第2四半期の榛名山噴火で噴出した角閃石安山岩を主要石材としており、「角閃石安山岩削石積石室」と呼称されてきている〔尾崎1966、右島1993〕。当該石室は、観音山古墳にとどまらず、周辺地域の有力古墳にも数多く確認できる。加えて、それぞれの古墳副葬品にも顕著な半島色が見い出せる。新羅製の出字式金銅冠を出土した前橋市山王金冠塚古墳もその一つである。これらの古墳相互の間に、観音山古墳を中心とした強い結びつきが想定される。

上毛野地域と朝鮮半島との直接的関係性は、5世紀までさかのぼる〔群馬県立歴史博物館2017〕。当地域に渡来人が数多く迎えられ、組織的な馬生産等に関与したことが明らかにされている。その受け入れ先が、当地域中・西部の首長層であった。保渡田古墳群形成の端緒となった井出二子山古墳の副葬品には、加耶・新羅系の最先端の品々が豊富である。

一方、当地域初現例の一つである前橋市前二子古墳の横穴式石室は、加耶西部の固城松鶴洞1B号墳1号石室との直接的関係が指摘されている。このような両地域間の関係性は重要である。

観音山古墳をめぐる上記のような考古・歴史的状況を踏まえたとき、本墳横穴式石室は、加耶地域南西部の横穴式石室との類縁性が強くうかがわれる。観音山古墳を構成する様々な要素における、半島南部との関係性から、その成立背景にも迫ることが可能である。

【キーワード】 上毛野地域、朝鮮半島、綿貫観音山古墳、半島系副葬品、角閃石安山岩削石積石室、古東山道ルート、加耶南西部

はじめに

群馬県高崎市に所在する綿貫観音山古墳（以下では、「観音山古墳」と略称）は、関東地方の6世紀後半を代表する前方後円墳であり、全国的にも非常によく知られている。その理由として、この時期の日本列島を代表する奈良県藤ノ木古墳や福岡県沖ノ島祭祀遺跡等の出土遺物に通じるような豪華で豊富な金属製品等の存在があり、対比的な観点も含めて検討の俎上にのぼることがよくある。その場合、朝鮮半島・中国とのことのほか強い関係性がうかがわれる点が、一段と関心が寄せられる要因となっている。

このように観音山古墳の副葬品の内容が、広く注目を集めるところとなってきたが、一方でこれらが納められていた横穴式石室については、十分に関心が注がれているとは言い難いところである。昭和43年以来実施されてきた本墳の一連の発掘調査においては、石室の特質解明のためにも、大いに意が注がれ、先年刊行された大冊の調査報告書においても周到な基礎的検討が施されている〔群馬県埋蔵文化財調査事業団1998・99〕。

筆者も、これまで観音山古墳石室について、角閃石安山岩削石積石室の検討〔右島1993〕、半島系遺物の多出の実相〔右島2008〕、石室壁面に差し込まれた鉤状鉄製品〔右島2011〕、構築過程から見た墳丘と石室の相関関係〔右島2011a〕等、いくつかの視点から論及してきた。本稿では、これらの論考を踏まえた上で、観音山古墳の横穴式石室について、石室の構造的特徴、系譜的關係、築造背景を中心に検討してみたいと思う。

本墳が所在する上毛野地域では、観音山古墳以前に当たる5世紀末～6世紀初頭のものを初現とし、関東地方では先駆的に、しかも普遍的に近い広がりでも横穴式石室が採用され、定着していく地域特性を有している。ところが、横穴式石室が取り分け盛んだった当地域における変遷過程の中にあつて、観音山古墳の石室は異質・断絶性が顕著である。おそらく、外部からの新たな系譜・技術的影響の下に成立した可能性が考えられる。その諸特徴を見ていくならば、朝鮮半島南西部の加耶地域との関係性が構造的特徴の中に見い出せそうである。

当地域の場合、5世紀以来、様々な考古資料の中に半島との関係性が顕著に継続してきている。従来の古墳時代の日朝交流史研究においては、ヤマト王権が主導する交流のわく組みの延長上において列島諸地域（弥生時代以前から直接交流の歴史を有する九州地方を除く）が客体的に参画したものと理解されてきた。このことが当を得ている側面はもちろんあるが、それと同時に、地域性にもとづく独自の交流の側面も存在していたのではないかと考えている。

前橋市に所在する6世紀初頭の大型前方後円墳・前二子古墳（墳丘長94m）の横穴式石室は、当地域の初現期に属するものである。その横穴式石室の構造的特徴を検討していくと、柳沢一男氏も指摘しているように、韓国慶尚南道固城松鶴洞1B号墳1号石室との直接的関係性が指摘されているところである〔東亜大学校博物館2005、柳沢2006〕。上毛野地域におけるこのような石室成立背景の可能性も注目する必要があるだろう。

なお、石室の左右表記は、入口側から奥に向かってのそれである。また、石室使用石材の供給が関係する6世紀第2四半期の榛名山噴火（Hr-FP）については、「FP噴火」と略称する。

①……………観音山古墳石室の基礎的整理

1. 観音山古墳の概要

位置 利根川の支流である烏川へと流入する井野川右岸に位置する。この地点から烏川の合流点までは約2kmの至近である。さらにこの合流点から烏川を8km下ると、現在の利根川への合流点に至る。日本列島屈指の水量と流域面積を誇り、滔々と流れる利根川は、この時代東京湾へと注いでいたわけであり、これを水運として十分に利用できる優位地点に位置していたことがわかる。一方、7世紀後半に始まる東山道駅路に関わると考えられている道路状遺構が各地で確認されているが、そのルートは、本墳の北側の至近位置を東西に走向している〔高崎市教育委員会1997、玉村町教育委員会2007〕。東山道駅路の前身に当たる畿内と東国を結ぶこれに近い内陸ルートは、5世紀後半には成立していたと推測されるので、当地が内陸交通上の重要地点であったことがよくわかる〔右島2008〕。

そのため、観音山古墳の周辺一帯は、前期から後期にかけて有力古墳が連綿と続く伝統的地域となっている。主な古墳としては、前期の元島名將軍塚古墳（前方後方墳、3世紀末）、下郷天神塚古墳（前方後円墳、4世紀後半）があり、中期の前方後円墳として普賢寺東古墳（4世紀末～5世紀初）、岩鼻二子山古墳（5世紀前半）、不動山古墳（5世紀前半）、若宮八幡北古墳（帆立貝式、5世紀後半）等がある。また、井野川との合流点から烏川を上流へ約5km行くと、倉賀野・佐野古墳群（浅間山・大鶴巻・長者屋敷天王山・小鶴巻古墳等がよく知られている）があり、前期以来連綿と続く一大古墳群となっている。

墳丘及び外部施設 墳丘は主軸を北北西から南南東に取り、前方部を北側、後円部を南側とする二段築成の前方後円墳である。このやや変則的な主軸決定は、井野川右岸に沿って形成された微高地の走向を最大限に取り込んだためである。ちなみに、後円部に位置する横穴式石室は、通有のものとは異なり石室主軸が墳丘主軸に直交していない。これは南西への開口を優先したための変則性と考えられる。

墳丘裾部での規模は、墳丘長97.24m、前方部前幅63.1m、後円部径61mで、高さは前方部9.1m、後円部9.44mである。周壕は二重になっており、内壕は幅約20～30mの盾形を呈し、それを幅約8～10mの中堤がめぐり、さらにその外側に幅約7～10mの外壕がめぐる。この時期の上毛野地域にあつては、前橋市総社二子山古墳（現状墳丘長約90m。後円部東側が削平されている）とともに最大級である。

墳丘及び中堤に葺石が施されていないことも特徴的である。古墳の周辺一帯が石材環境に恵まれていないことも要因であるが、さほど遠くない烏川に出向けば十分得られるし、本墳に南接する不動山古墳には存在することから、あえて施さなかったことも考える必要がある。

充実した埴輪樹立も、本墳の大きな特徴である。配置されたのは、基壇面上と墳頂部である。個々の埴輪を見てみると、それぞれの埴輪が大型品であり、細部にいたるまで丁寧に表示している。しかも、構成する形象埴輪の数が非常に多く、バラエティーに富んでいる。造墓活動への強い意欲の

表れと考えていいだろう。

2. 観音山古墳の横穴式石室

概要 後円部第二段に位置し、南西に開口する両袖式である。石室全長12.63m、玄室長8.25m、同奥幅3.85m、同前幅3.11m、同高さ奥寄りで2.30m、前寄りで1.90m、羨道長4.46m、同奥幅2.58m、同前幅1.34m、高さ奥部で1.25m、入口部で約1mである。壁体にはFP噴火の結果利根川に流下した角閃石安山岩の加工石材を、天井には牛伏砂岩（凝灰質砂岩）の塊石を使用している。長期にわたる丹念なフィールドワークを基礎に、河川域における角閃石安山岩の存在形態を追究し、古墳における採取形態を明らかにした秋池武氏によれば、前者は、本墳の北東方約7kmの現広瀬川（旧利根川）付近から〔秋池2000〕、後者は本墳の南方約10kmの藤岡市の鮎川付近から運び込まれた（秋池氏教示）と推測されている。なお、埋葬終了後、あまり期間をおかないで玄室天井石が崩落した可能性が指摘されており〔矢野1982〕、後世の盗掘を免れることにつながった。

石室が位置するのは墳丘の基壇面上であるが、実際は、最初に石室構築基盤面を計画された基壇面の高さ近くまで強固に造成し、墳丘築成と併行しながら石室構築を行っている。次に、石室構造のうち、本石室に特徴的な要素を中心に詳しく見てみよう。

平面構成 石室の規模は前述した通りである。玄室長に対して羨道長が極端に短いのが注目される。その場合、壁面構成のところでも後述するが、構成上の大きな区分点が羨道中途（入口から奥へ1.75m）に確認でき、手前は粗雑な川原石構成、奥半は比較的整然とした角閃石安山岩削石積となっている。想定される原企画は、明らかに、この区分点より奥側で完結しており、石室入口部となる墳丘第二段裾部との位置的整合性をはかるため、前半部を継ぎ足したものと考えられる。とするならば、本来の羨道長は約2.7mであったと考えられ、最終的な羨道長よりかなり短かったことがわかる。

玄室平面規模は、それ以前の上毛野地域で最大級の規模を長さ、幅（特に奥幅）とも大幅に上回る。ちなみに、6世紀第2四半期～中葉の所産と推定される榛東村高塚古墳（前方後円墳、墳丘長約60m）の場合、玄室長6.54m、同奥幅2.15mである。観音山が、従来の常識を大幅に上回る大規模石室を志向していたことがよくわかる。全体としての平面形は、玄室・羨道とも前部より奥部の幅が勝る羽子板形を呈している。その場合、羨道、玄室とも右側壁が石室主軸と平行し、奥壁と直交するのに対し、左側壁を奥に向かって外側に開かせたものである。

玄室入口から奥に5.25m行った床面上に石室主軸と直交して幅いっぱい同形同大の扁平な円礫が配列されている。発見時に原位置を保っていた石はややまばらであったが、当初は密接して配されていたものと推測される。これより奥半部の床面は、手前側とは明確に異なる小円礫が厚く敷き込まれ、屍床部を形成していた。この範囲は、壁面上部の6箇所（4箇所が原位置）に差し込まれた布幕垂下用の鉤状鉄製品の位置に対応している〔右島2011b〕。

壁面・断面構成 壁面を構成している石は、角閃石安山岩の加工石材である。その場合、玄室と羨道で形状、規格、加工度合が明確に異なる。玄室は、石室内から見て上下左右と内面の五面を削り加工したものを使用している。加工の度合いは輪郭に礫面が残らないまで及ぼしており、左右に長い整った長方形に仕上げている。各石材の背面はすべて未加工である。

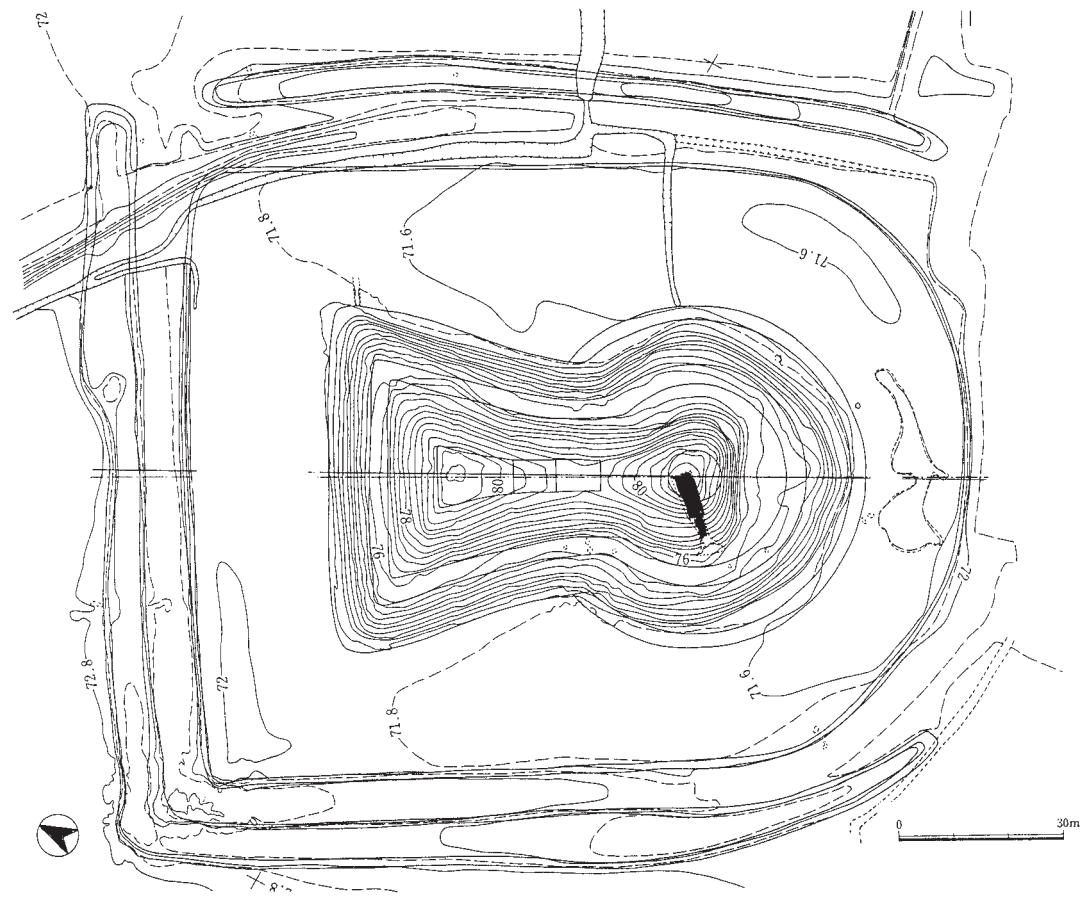
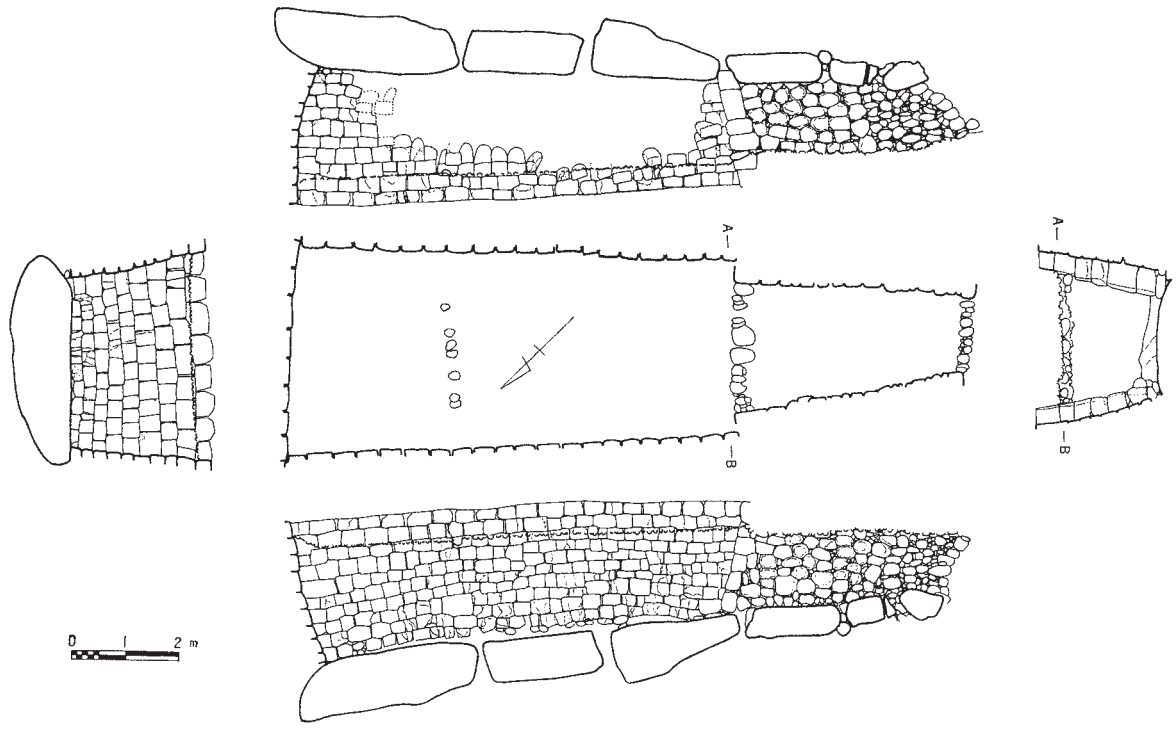


图1 観音山古墳石室実測図・墳丘測量図

積み上げ法は、基本的には横の目地が通る互目積であり、一部隣り合う石材相互でL字形に欠き取って組み合わせる切組積の手法が取り入れられている。左右側壁が10段、奥壁が9段構成である。なお、すべての石材が奥行き方向を最大長とする小口積である。長方形面の規格は、基本的には同形同大を志向していることが看取され、整然とした壁面を実現している。しかし、寸分違わぬ規格性を有しているわけではない。この方針が貫徹されているのは、玄門を兼ねる羨道最奥部の側壁石までである。個々の石材の大きさは、左右幅30～40cm、高さ25cm前後を中心としている。

袖部の屈曲は、両袖とも天井面に達するまで明瞭に確認でき、羨道壁と玄室側壁面が連続しない。また、玄門構造を意識して同形同大に近い石を門柱状に積み上げている点が特徴的である。ただし、この部分が石室内に突出するわけではない。

前述したとおり、羨道部は石室入口寄りと奥寄りで壁面構成がまったく異なる。奥半部は、玄室と同様に角閃石安山岩を使用しているが、四隅に礫面を残すものが大半で、積み上げに必要最小限の加工を施したものである。そのため縦目地の通る重箱積が基本となっている。個々の石材の大きさはまばらであり、取り分け右壁に比べ左壁は統一性に欠ける。石材は玄室使用石材にくらべ一回り小さい。隣り合う石材相互に生じる間隙には、小振りの棒状礫を充填して安定化をはかっている。

このように、本石室は壁面構成からも明確に3区分されるところであり、羨道最奥部の玄門部分を含めた玄室部分で一旦完結し、これに羨道奥半部の本来的な羨道が取り付けられ、さらにその手前に川原石使用の付加的羨道が取り付く。

天井面は、羨道入口から玄室奥部にかけて徐々に高さを増していくが、面としては連続しており、段を持たないのが特徴である。天井石の大きさも注目される。それ以前の古墳の玄室天井面は、いくつもの天井石を連ねてカバーするものであった。観音山古墳では、玄室幅をこれまでにない大きさに拡大し、しかも3石でカバーしている。当然、従来の最大の天井使用石材を大きく上回る巨石(最大は、最奥部の22t)が使用されることにつながった。

一方、床面では、羨道が墳丘基壇面と同じ高さで連続し、玄室床面は入口部で一段18cm下がる有段構造となっている。

3. 観音山古墳横穴式石室の諸特徴

観音山古墳石室の主な特徴を整理すると以下の通りである。

- ① 石室は後円部基壇面上で南西に開口する両袖式。
- ② 壁石材には、FP噴火で噴出した角閃石安山岩を面加工したものを使用する。石材は、設置時の背後の面を除く5面を丹念に削り加工している。
- ③ 玄室プランは、直線から構成される長方形プラン(羽子板形)の単室構造である。
- ④ 玄室に比べて羨道が大幅に短い。
- ⑤ 玄室壁体は、両側壁・奥壁とも整然とした多石構成であり、横の目地が通る互目積である。
- ⑥ 袖部の屈曲は天井面にいたるまで明瞭に認められる。
- ⑦ 天井面は羨道から玄室にかけて段をなさず、連続している。
- ⑧ 床面は羨道から玄室にかけて一段下がる框構造である。
- ⑨ 従来の使用石材の限界を遙かに上回る巨石が天井石に使用される。

本墳石室からは、様々な側面に、それ以前の上毛野地域の横穴式石室にはない新展開を確認できる。その場合、石室の形態・構造上の革新性に加えて、構築技術上からも加工石材の使用、巨石石材の使用等、新たな石室構築技術の導入の下に成立したことをうかがわせる。

4. 副葬品

石室内出土の副葬品について概観しておきたい。観音山古墳は単独葬と考えられている。わずかに残る人骨片の鑑定結果は、1体分であった。各種耳環が13組出土している点に対する評価は今後の課題として残るが、追葬を決定づける痕跡は今のところ確認されていない。このことが当を得ているならば、大量の充実した装身具、武器、武具、馬具、銅鏡、銅製水瓶等からなる副葬品は一人の被葬者に帰することになる。それらうち、半島系遺物で舶載品の可能性が指摘されている〔内山2011〕ものを中心に概観してみる。

大刀は全部で4振りあり、そのうちの手の込んだ振り環頭と頭椎式の倭風大刀が佩用不可能な全長約130cmの大型品であるのに対し、新羅系の銅製三累環頭大刀は、復原長80cm強の実用的な規格である。小札甲は2領あり、うち緘孔1列が配された小札から構成される1領が半島系とされており、この1領分のまとまりとともに同じく半島系とされる半月形の鉄製胸当も出土している。異形冑と称されている鋳留突起付冑とともにセット関係で入手している可能性が強い。馬具類では、金銅製心葉形透彫杏葉、鉄地金銅張心葉形鏡板付轡、金銅製歩揺付飾金具等の新羅系馬具とされる一群がセット関係をなす。また、この時期としては類例の少ない鉄製鑣も半島系と考えられている。これに金銅製素環鏡板付轡、鉄製素環鏡板付轡等をはじめとする列島内で製作されたと思われる大量の馬具類がある。

武寧王陵出土品や伝滋賀県野洲市三上山下古墳出土鏡2面と同型鏡とされる獸帯鏡については、半島→倭、倭→半島の両論の移動が考えられているが、副葬品としての銅鏡の位置づけを考えると後者の可能性の方がより強い〔辻田2018〕。山西省庫狄廻洛墓等、6世紀代の中国墓室副葬品との形態的類似が指摘されている銅製水瓶も搬入品の可能性があり、製作地・入手ルートが気になるところである。

その他、注意されるものとしては、金銅製鈴付大帯と一体的に置かれていた銀装刀子5点に加えて鹿角装刀子6以上、木柄刀子9の多さが目立つ。鉄鉾9、石突5の多さもしかりである。また、遺骸を覆っていた可能性のある布に綴じ付けられていたと想定されている117個以上の金銅製半球形飾金具も注目される。

なお、副葬品ではないが、石室奥半部の両側壁と奥壁の天井寄りの6箇所（実際に確認できたのは左側壁と奥壁で崩壊していた右側壁は推定）に差し込まれていた鉤状鉄製品は、屍床部の周囲を覆っていた布幕状の構造の存在をうかがわせるものであり、藤ノ木古墳、武寧王陵等における存在とも併せると半島系要素としての位置づけもできる〔右島2011b〕。

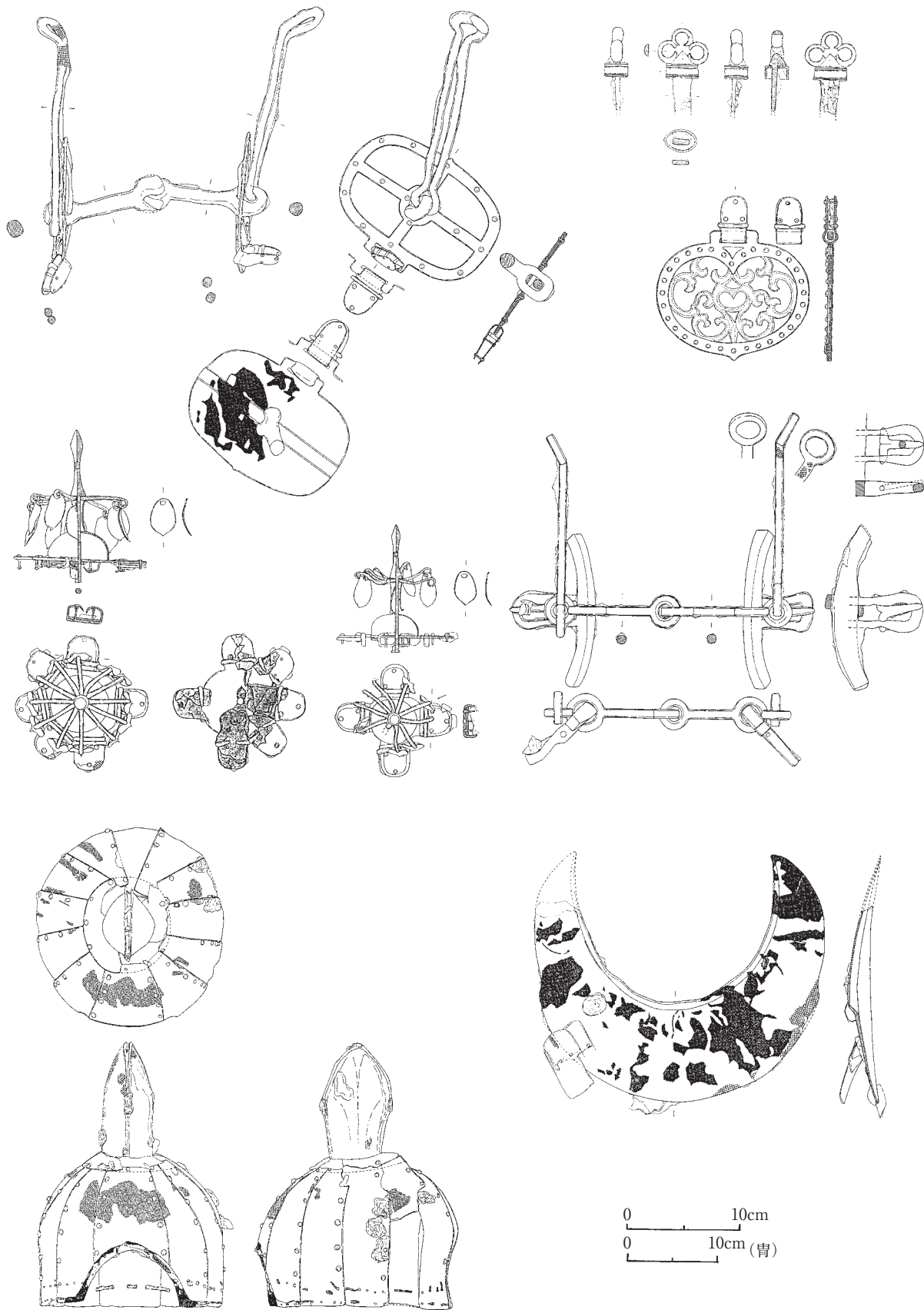


图 2 观音山古墳出土主要副葬品

②……………角閃石安山岩削石積石室と観音山古墳

1. 角閃石安山岩削石積石室概要

前節で整理した観音山古墳石室と構造的諸特徴を共通にする石室が、周辺一帯で多く認められる。この一群の石室を「角閃石安山岩削石積石室」と呼称してきている。この石室形式は、観音山古墳の築造を契機として成立したものと考えられる。その最大の特徴は、6世紀第2四半期のFP噴火後、旧利根川（現広瀬川。前橋市街地の西側を南～南東流している現利根川の流路は、戦国期に変流した結果である[沢口2000]）に流下した石材を利用して石室を構築しているところにある。実際、現在の広瀬川の流路に沿った地域に当たる前橋市、伊勢崎市域に目立って当該石室が分布している。

観音山古墳の場合は、旧利根川流路からは少し離れるが、旧利根川を下り、烏川との合流点から遡上するルートが有力な石材搬入路として考えられる。同じく烏川流域で当該石室が多く認められる現玉村町地域の場合も同様である。なお、この分布域より下流の太田市から館林・板倉町、さらには、対岸の埼玉県域等にも角閃石安山岩使用の石室が数多く確認・指摘されている[尾崎1966, 宮田1989]。角閃石安山岩を使用する点では共通するものの、構造的には相異点が多い。大きな相異点としては、これら一群の多くが、5面削りではあるが、石材が相対的に小振りで、石材の四隅に礫面を多く残したままの加工であり、また、千代田町赤岩堂山古墳、館林市淵ノ上古墳をはじめとし顕著な胴張構造を呈している。根本的な石室築造原理が異なっていたことがわかる。そのため、本稿では、観音山古墳石室に代表される諸特徴を備えたもの限定して「角閃石安山岩削石積石室」の石室呼称を用いることとしたい。

該当する主な石室を整理すると次表のようになる。次項では、代表的な古墳について見てみることにする

2. 角閃石安山岩削石積石室の諸例

総社二子山古墳後円部石室 観音山古墳と同時期に属し、墳丘規模も伯仲する当墳に同形式石室が共有されている点は注目される。前橋市総社古墳群の最終段階の前方後円墳であり、これに続く7世紀前半の大型方墳・愛宕山古墳の時期には、上毛野地域全体の統合的地位に就き、律令制上毛野国への移行を中心的に担っていったことが推測される[右島1985]。

本石室の場合、天井石が大きくずれているが、かつては部分的に観察可能であった。その後崩壊が大きく進み、完全に埋没してしまったため、今では、戦前の調査データが貴重な手掛かりである。観音山古墳と詳細に比較検討するのは無理であるが、規模・形状とも接近しており、共通の企画に基づいている可能性が強い。ただし、壁体の構成、石材の加工度は大きく異なる。壁石材は5面削りであるが、石材の四隅に礫面を残す粗い加工で、大きさも統一性に欠ける。たずさわる工人が観音山とは異なっていたことを物語る。本墳出土と伝えられる頭椎大刀の近世絵図があるが、観音山例と比較検討すると細部に至るまで瓜二つである点が注意される。両墳に関わる勢力の緊密な関係を石室共有とともに裏づけるものである。

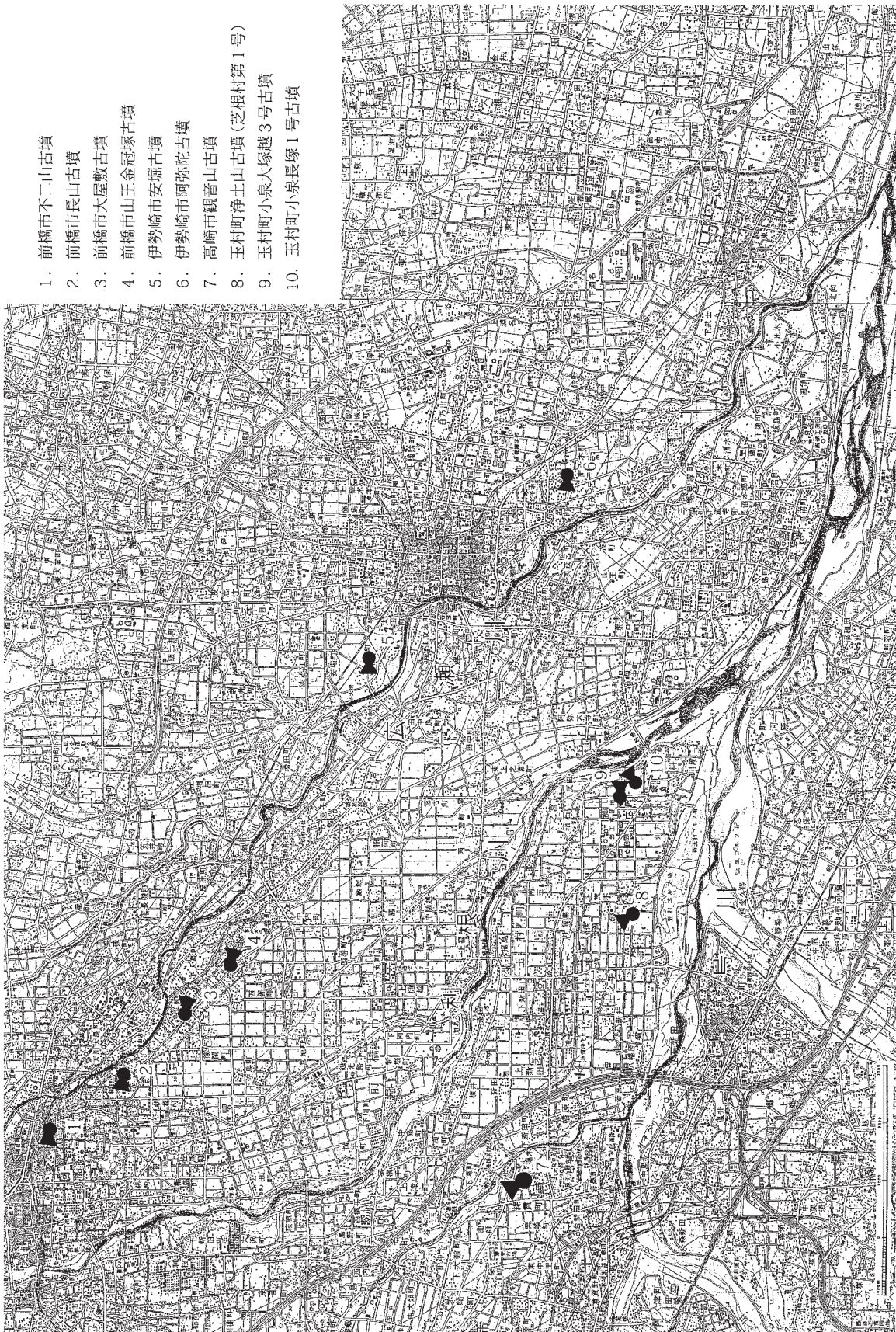


图3 角閃石安山岩削石横石室分布图

角閃石安山岩削石積石室の諸例

古墳名	所在地	墳形 (墳長・径:m)	石室 (単位:cm)										石室開口方向	主な副葬品, その他
			全長	玄室長	同奥幅	同前幅	同奥高	羨道長	同奥幅	同前幅	同奥高			
塩原塚	前橋市田口町	円 (14)	599	315	210		201	284	125				S70W	鉄直刀2・小刀1・鎌, 馬具(轡・鐙・辻金具・飾金具), 金銅環16
上庄司原2号	前橋市富士見町横室	円 (28)	590	360	212	160	220	226	90	85			-	鉄直刀1・小刀2・鎌, 馬具(鐙・鞍・素環鏡板付轡・辻金具), 須恵器三連甕・提瓶
総社二子山	前橋市総社町	前方後円 (90)	(940)	(688)	340	(260)	-	(188)	185	-			S15W	頭椎大刀, 鈴釧, 須恵器
不二山	前橋市文京町	前方後円 (50)	892	482	306	264	260	410	140	130			S55W	金銅・銀製耳環, 金銅製透彫片多数(冠?), 鉄直刀2・鉦2, 各種玉類, 馬具(鉄地金銅張雲珠, 轡, 鐙), 須恵器
桂萱大塚	前橋市東片貝町	前方後円 (57)	830	560	380	-	-	-	-	-	-	-	-	
長山	前橋市朝倉町	前方後円 (77)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
大屋敷	前橋市後閑町	前方後円 (81)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
山王金冠塚	前橋市山王町	前方後円 (52.5)	(517)	364	242	-	-	(155)	-	-			S60W	出字式金銅冠, 金銅大帯, 金銅・銀製, 小札甲, 堅矧広板衝角付冑, 金銅装大刀装具, 鉄製直刀2・鉦4・石突4・刀子鎌馬具(素環鏡板付轡・鉄地金銅張雲珠・辻金具), 須恵器
安堀	伊勢崎市安堀町	前方後円 (73)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
御富士山4号	伊勢崎市安堀町	円?	(484)	430	229	212	-	(60)	-	-			S30W	
清音1号	伊勢崎市茂呂町	円 (20)	686	420	192	142	-	246	113	94			S30W	金銅装円頭大刀, 鉄直刀1・小刀4・鎌, 馬具(素環鏡板付轡, 鐙), 須恵器
阿弥陀	伊勢崎市南千木町	前方後円 (約50)	725	420	252	232	-	295	155	110			S30W	銅製三累環頭大刀, 鉄製倒卵形鐙2・鎌, 須恵器
鶴巻	伊勢崎市東小保方町	円 (34)	520	295	210	180	195	225	123	110	120		S55W	金銅環, 鉄刀子・鎌, 馬具(素環鏡板付轡, 鉄製鞍金具, 鉄地金銅張辻金具), 須恵器
綿貫観音山	高崎市綿貫町	前方後円 (97.24)	1263	843	394	322	270	427	258	134	203		S43W	獣帯鏡, 神獸鏡, 銀地鍍金空玉31, 各種玉類, 各種耳環13, 金銅製半球形飾金具117以上, 金銅製鈴付大帯, 甲冑類(小札甲2・胸当・臑当・籠手・突起付冑), 大刀(振り環頭, 頭椎, 三累環頭, 直刀), 小刀3, 鉄製刀子20・鉦9・石突5, 鎌493以上・両頭金具10, 馬具(鉄地金銅張心葉形鏡板付・金銅製素環鏡板付・鉄製素環鏡板付・鉄製轡, 鉄製・木胎漆塗壺鏡, 金銅製花卉形鈴付・鉄製雲珠, 金銅製花卉形鈴付3・鉄製2辻金具, 金銅製歩揺付飾金具77, 銅製環鈴, 金銅装鞍), 鉄製鑿3・鏡, 銅製水瓶, 須恵器
芝根村1号	玉村町下茂木	前方後円 (54以上)	830	480	250	215	-	365	157	124	-		S55W	鉄地金銅張耳環, 両頭金具, ガラス小玉
オトカ塚	玉村町下茂木	前方後円 (86.5)	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
萩塚	玉村町上茂木	円 (28以上)	866	540	178	140	-	326	88	88	-		S24W	墳丘主軸と直交して後円部に位置したとすると南南西に開口が推定される 金銅環, 鉄製銀象嵌円頭大刀(金銅装透彫鞘金具), 小刀, 鉄製斧・刀子・鏡・鎌, 馬具
小泉大塚越3号	玉村町飯倉	前方後円 (45)	885	520	210	151	-	332	115	115	-		S50W	金銅冠片, 金銅環18, 各種玉類, 金銅製単鳳環頭大刀, 鉄直刀8・鉦2・石突2・鎌・刀子, 馬具(素環鏡板付轡, 鞍, 鐙兵庫鎖, 青銅製馬鈴, 鉄地金銅張菱形飾金具), 須恵器
小泉長塚1号	玉村町小泉	前方後円 (推定50)	880	595	235	210	-	285	115	110	-		S45W	金銅透彫片, 耳環21, 各種玉類, 金銅製単鳳環頭大刀, 鉄製大刀・刀子・鎌, 馬具(鉄地金銅張雲珠・辻金具鉄地金銅張菱形鏡板・杏葉, 長方形飾金具), 須恵器

不二山古墳 石室全体が比較検討できるものの中では、最も観音山古墳に近いのが本石室である。墳丘長約50mと観音山の1/2である。石室は一回り小さいが、平面形、壁体構成、開口方向等も非常によく似ており、同一技術工人の手になった可能性が強い。現在までのところ、ここまで石室が類似しているものは他にない。本石室の場合も、玄室壁体と羨道壁体の構成を明確に差別化し、さらに入口寄りの羨道1.1m分が付加的なものとなっている点も、観音山古墳に通ずるものである。玄室の奥半部床面には、主軸と直交して角閃石安山岩を削り加工した長方形石材を連ねた高さ約40cmの仕切石が設置され、屍床部を明確に構成していた。

天井面は、羨道から玄室にかけて連続するが、床面は一段約50cm下がる有段構造を呈している。また、袖部をほぼ同形同大の石材を6～7段に積み上げて門柱状にしている点も観音山に通じる。

副葬品の内容も興味深いものである。とりわけ、円形歩揺（魚形が2点ある）が数多く取り付く金銅製透彫製品の破片が数多く存在する。金銅冠に関わる破片の可能性が極めて強い。今後に期したいと考えている。

本墳は、前橋市南東部、広瀬川（旧利根川）右岸に所在し、前期以来連綿と有力前方後円墳（後方墳）が続く朝倉・広瀬古墳群に属するものである。その多くは、未調査のままに消滅してしまったが、その中には、かろうじて主体部に角閃石安山岩削石が使用されていたことだけは確認できた前方後円墳があった。長山古墳と大屋敷古墳である。昭和10年の古墳分布調査のデータを参考にすると、いずれも墳丘長80m以上であったことがわかる。同時期の同一古墳群の中では、不二山古墳の上位に位置づけられる最大級の古墳であることから、類似の石室であった可能性を想定してよいだろう。

山王金冠塚（二子山）古墳 朝倉・広瀬古墳群の分布の北西端に位置する不二山古墳に対して、本墳は、南東端に位置している。かろうじて残る墳丘は、長さ56mと不二山に近い。壁面が側・奥壁とも多石構成である。玄室側壁は、石材はやや大振りであるが、統一性を有しているのに対し、奥壁はさらに大振りの石を用いており、統一性に欠ける。ただし、石材の輪郭に礫面は残さない。開口方向は南西である。

本墳で取り分け注目されてきたのは、金銅製出字式冠の存在である。明らかに、新羅式冠が確認されている列島で唯一の事例である。これに加えて、金銅製大帯、小札甲、堅矧広板鉾留式衝角付冑、鉄地金銅張馬具類、金銅装大刀、鉄銚・石突4組等が伴い、充実した内容を示している。

阿弥陀古墳 広瀬川を下流へ行った伊勢崎市域で最近前方後円墳が調査された。付近一帯には、かつて茂呂古墳群と称する比較的規模の大きい古墳群が所在しており、その一角を占める。

すでに前方部を失っていたが、復元すると墳丘長約50mの規模である。石室の規模は、全長7.25m、玄室長4.20m、同奥幅2.52m、同前幅2.32m、同中央幅2.80m、羨道長2.95m、同奥幅1.55m、同前幅1.10mである。玄室平面において、側壁がゆるやかな胴張りを呈する点が特徴的である。このことを除けば、玄室よりも大幅に短い羨道、奥・側壁とも統一性のある多石構成、南西開口等、観音山古墳石室の基本に通じるものである。なお、石材の加工度は、四隅に礫面を若干残すものであるが、それほど粗くないため、互目積を可能にし、比較的整然とした壁面構成となっている。

調査前の盗掘のため、副葬品の大半を失っていた。かろうじて遺ったものに、銅製三累環頭大刀があり、注目された。本墳の近くには、同時期の群集墳・清音古墳群があり、そのうちの有力墳に

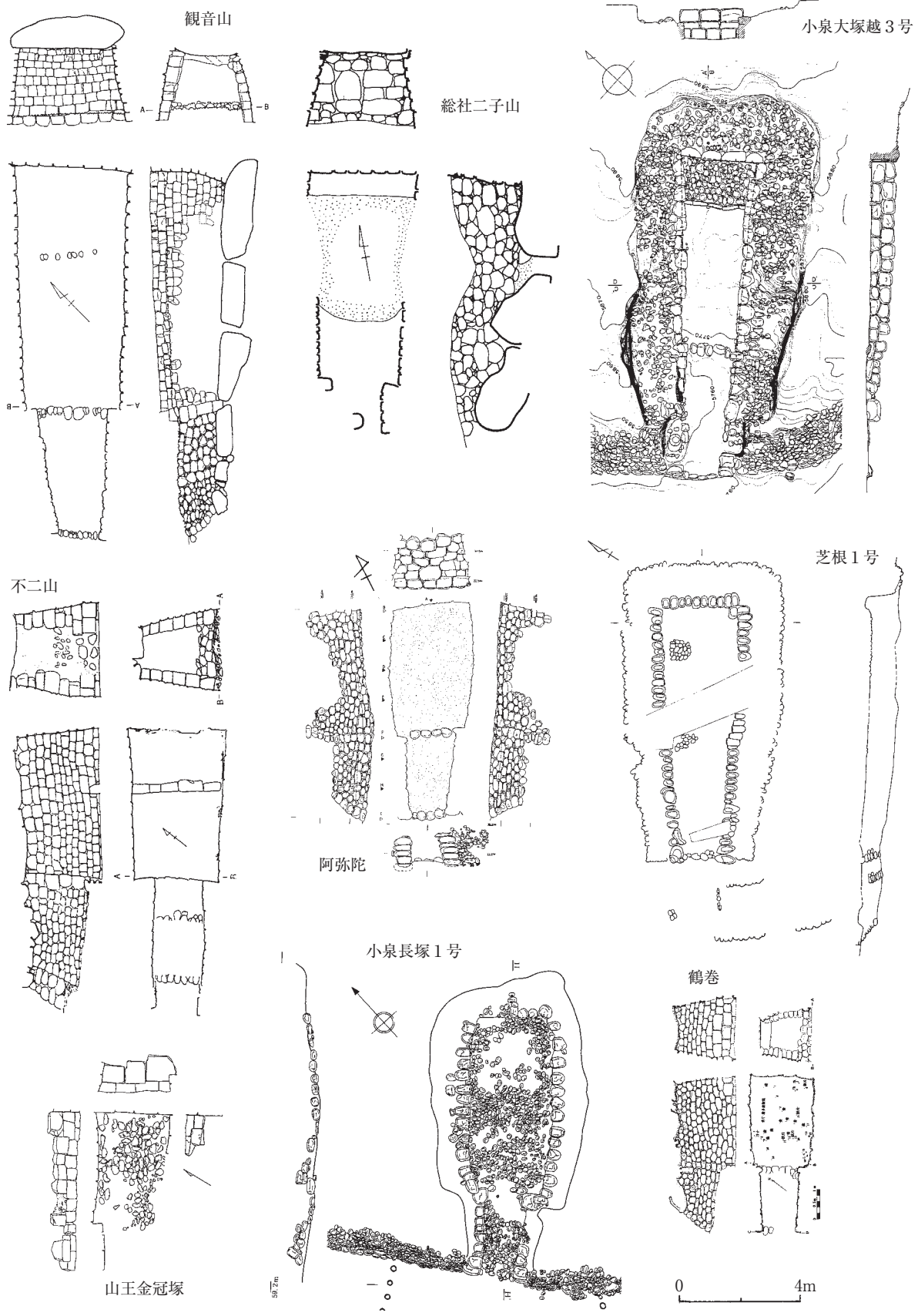


図4 主要角閃石安山岩削石積石室

属する直径24mの二段築成の円墳1号墳は、阿弥陀古墳と共通し、一回り小さい石室を実現していた。

旧芝根村1号墳 現在の玉村町に当たる烏川左岸には総数50基以上からなる川井・茂木古墳群があり、これに属する。これとは別に23基以上からなる小泉古墳群が知られている。両古墳群は大きく離れているわけではないので、一大古墳群の中の支群としてとらえることも可能である。両古墳群では多くの角閃石安山岩削石積石室が知られている。

本墳は墳丘長54m以上の二段築成の前方後円墳である。墳丘の破壊が著しく、石室も大半を失っていたが、根石の抜き取り痕跡から石室全長8.33m、玄室長4.80m、同奥幅2.50mで南西開口の両袖式石室が推定復元された。

同じ川井・茂木古墳群に属するオトカ塚古墳は、現在は完全に墳丘を失っているが、墳丘長約90mの規模が伝えられてきていた。その後のトレンチ調査で葺石根石による墳丘裾部を複数箇所を確認した結果、後円部径約50mの数値が得られ、墳丘長も86.5mと復元された。また、墳丘該当地から5面削りの角閃石安山岩が確認されており、墳形・規模とも併せ、角閃石安山岩削石積石室であった可能性が非常に強くなった。なお、本墳から出土した馬形埴輪は、高さ約150cmに復元される最大級の大型品で、観音山古墳の馬形埴輪に匹敵するものである。

小泉大塚越3号墳 現在の烏川と利根川に挟まれた玉村町芝根に所在する墳丘長46mの二段築成の前方後円墳である。主体部の角閃石安山岩削石積石室は、壁体の下半部のみの遺存であったが、副葬品も全体像を類推できる程度には遺存していた。石室全長8.85m、玄室長5.20m、同奥幅2.10m、同前幅1.51mと、観音山にくらべ細身の感が強いが、壁面構成が統一性の取れた多石構成である点や、玄室と羨道の長さの配分、羨道から玄室への床面が一段下がる構造、南西開口である点等は共通している。奥壁寄りの床面には石室主軸と直交して削り石加工の長方形石材が幅いっぱいにつながれ、その内側に扁平な川原石を敷き込み、手前の床面より一段高い屍床部を構成している。

副葬品としては、単鳳環頭大刀、鉄地金銅張馬具類等に加えて出字式金銅冠の端部と推測される複数の破片が注目される。今後の詳細検討による確定作業に期したいと考えるが、可能性は強く、注目すべき遺物である。

小泉長塚1号墳 調査では、径約30m、二段築成の円丘部のみの確認であった。しかし、円丘部の規模・形状、円筒埴輪が5段構成であること等から、墳丘長約50mの前方後円墳の可能性が非常に強い。墳丘・石室は天明3年(1783)の浅間山噴火で現利根川を流下した土石流により著しく破壊を受けていたが、石室根石部分がかろうじて遺存していた。石室規模は、全長8.80m、玄室長5.95m、同奥幅2.35m、同中央幅2.65m、羨道長2.85m、同奥幅1.15mを測る。前述した阿弥陀古墳とよく似ており、玄室壁面が少し胴張りを呈する平面構成で、側・奥壁とも多石構成である。

石室内の副葬品は、遺存状態はよくないが、全貌を十分うかがうことができるものであった。馬具類は、鉄地金銅張製の花形鏡板付轡・杏葉、鉄地金銅張長方形帯金具を基本とするものである。これに非常に立体的で出来の良い金銅製単鳳環頭大刀(環頭部分は鉄地の可能性がある。高田貫太氏と共に確認。)、金銅冠の可能性が強い金銅製透彫の破片があり注目される。

3. 角閃石安山岩削石積石室の成立と観音山古墳

角閃石安山岩削石積石室と角閃石安山岩削石使用石室 石室の構造的特徴等をもとに角閃石安山岩削石積石室と分類した一群の石室以外にも、角閃石安山岩を壁石材として使用しているものが、同一の古墳群、あるいは近接地域に数多く存在する。これを「角閃石安山岩削石使用石室」と呼称して区別することにする。むしろこちらの方が数は多い。これに属する石室は、統一性に欠け、概して石材の加工が粗雑であり、石室の完成度も劣る。観音山古墳の築造を契機にして成立した角閃石安山岩削石積石室の構築技術の一部を取り入れて築造されたものと考えられる。基本的には角閃石安山岩削石積石室を有する古墳が、前方後円墳及びこれに準ずる大型円墳であるのに対し、当該石室は、より下位の階層に属するものと言えよう。前稿〔右島1993〕ではこの点の整理が不十分であった。

いずれにしても、観音山古墳を中心に角閃石安山岩削石積石室を共通にしている諸古墳に関わる勢力は、政治的にも深く結びついた有意のグループ（以下「観音山グループ」と呼称する）を形成していたことが明らかである。と同時に、これらグループだけに固有の横穴式石室を創出していった積極的意図を看取することができる場所である。

分布 当時の利根川中流域と烏川流域が主たる分布域である。このことは、前述したように利根川を流下した角閃石安山岩で、壁石材として適当な大きさのものが安定的に得られる地点と一致する〔秋池2000〕。最も上流に位置するのが、右岸の総社二子山古墳と対岸の塩原塚・上庄司原2号古墳であり、現状で最下流に位置するのが阿弥陀・清音1号古墳である。さらに少し下流の伊勢崎市武士古墳群の前方後円墳・剛志天神山古墳が可能性が伝えられている。烏川流域（支流の井野川流域を含む）も下流域を中心に顕著な分布域となっている。その中心に観音山古墳があり、玉村町地域に数多く存在している。

古代上野国の区分で言うと、群馬郡、那波郡、佐位郡の利根川・烏川流域地域が該当する。律令制上野国の中枢域を占めるようになっていく地域に当たると言ってもよい。

副葬品に見る半島色 観音山古墳の副葬品に半島色が色濃く認められ、舶載品の可能性が指摘されているものが散見する〔内山2011, 太田2013〕。このことに加えて、その他の当該石室を有する古墳からも同様の副葬品が顕著に認められる点が注目される。取り分け、山王金冠塚の金銅製出字式冠、同様の冠の可能性が強い小泉大塚越3号墳の金銅破片、あるいは不二山・小泉長塚古墳の金銅冠の可能性が強い透彫金銅片は、日本列島における類例が極めて少ないだけにその集中が注目される場所である。これらの金銅冠は、詳細比較検討が必要であるが、少なくとも同一形式のものでないことは明らかである。

三累環頭大刀が観音山古墳に加えて阿弥陀古墳にも伴っていた。このように見えてくると、6世紀後半の上毛野地域では、観音山グループに目立って半島系遺物が集中する場所であり、他の古墳ではそれほど目立ったあり方を示しているわけではない。共通の基盤・背景の中で入手している可能性がある。

ところで、観音山古墳と井野川を挟んだ対岸（北東岸）約1.4kmに近接する慈眼寺の周辺には滝川2号墳（観音山に後出する6世紀第4四半期の前方後円墳）を中心にした群集墳が存在し、慈

眼寺に保管されていた同墳出土品の中に金銅装三累環頭大刀が確認されている。また、観音山の南西約2.3kmの烏川左岸に展開する総数約160基からなる倉賀野東古墳群中の倉賀野町185号墳からも銅製三累環頭大刀が出土している〔徳江1992, 東京国立博物館1983, 本村1990〕。観音山のごく周囲にはいくつかの古墳は存在するものの、大規模群集墳は認められない。対岸の滝川地区や烏川左岸の倉賀野地区に所在する群集墳を観音山との直接的関係性の中でとらえることは十分可能である。石室が角閃石安山岩削石積石室でないとしても、これら三累環頭大刀の集中は注目される。なお、同じ倉賀野東古墳群の観音山と同時期の円墳・倉賀野町74号墳（調査古墳番号：3号墳）から半島製の鉄製鉄が出土している〔塚越・柳沢ほか2002・3〕点も、注意してみていく必要があるだろう。

③……………観音山古墳石室の系譜と成立過程

1. 上毛野地域における横穴式石室の変遷と観音山古墳

ここでは、上毛野地域における横穴式石室の変遷過程の中で、観音山古墳が占める位置をあらためて確認しておきたい。

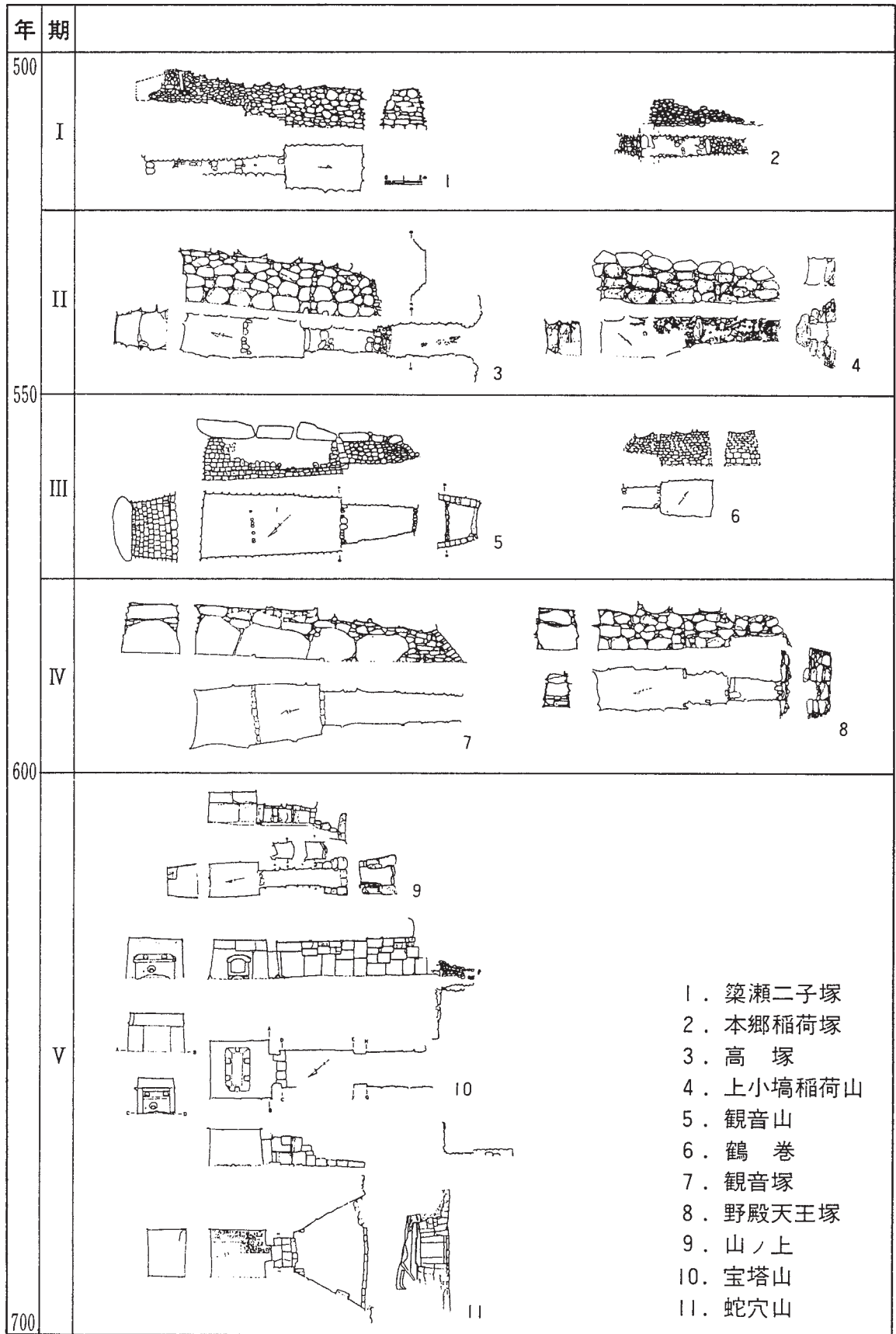
筆者は、当地域における横穴式石室の変遷過程を大きく5段階（Ⅰ～Ⅴ）の過程として整理している（第5図参照）。変遷上の画期をもたらしたのは、他地域からの新たな石室形式の導入（それに伴う構築技術の導入）であったと考えられる〔右島1994〕。

横穴式石室の導入から定着へ Ⅰ段階は、導入期で、5世紀末葉～6世紀第1四半期に当たる。安中市の築瀬二子塚古墳をはじめとし、当地域の中・西部の最有力前方後円墳に一齐に採用される。当該期の前方後円墳の場合、墳丘と石室が合理的に組み合わせられていない中で、石室奥壁中心を後円部中心に置こうとしたため、羨道が非常に長くなることにつながった。前方後円墳では両袖式、それ以外では袖無式と明確に区分され、片袖式はない。ちなみに、この後も一貫して片袖式が採用されない地域性を有している。壁体は、比較的小振りの河川礫あるいは塊石による多石構成であり、天井石は奥行きが少ないものを10石以上（玄室で4～6石）配している。

両袖式の場合、羨道から玄室にかけての天井面は連続しており、段をなさない。また、袖部の屈曲は、壁面の上半部では解消され、羨道壁と玄室側壁が面的に連続している。玄室を中心とした壁面が赤色顔料塗彩される点も、この段階の顕著な特徴である。ほぼ一齐に登場したにもかかわらず、石室間で細部を比較検討してみると、基本的要素には一定の共通項があるものの、細部構造は区々である。共通の専門技術者が関与していなかったことや試行錯誤の結果を物語る。主としてMT15の型式的特徴を有する須恵器を伴う。

なお、この段階に属する前橋市大室古墳群の前二子古墳の場合、長大な羨道、壁面赤色顔料塗彩等は、他の石室と共通であるが、壁体構成、閉塞構造、玄室入口部構造、屍床部構造等々は、まったく特有である。

観音山古墳の前段階に当たるⅡ段階は、榛東村高塚古墳を代表とし、6世紀第2四半期から中葉にかけての時期が当たる。墳丘と石室が整合性を持って計画されるようになり、Ⅰ段階の異常に長かった羨道は解消される。使用石材が顕著に大型化する点が注意され、小振りの石材による多石構



石室図は『群馬県史』による

図5 上毛野地域における横穴式石室の変遷

成は全く認められなくなる。ちなみに、玄室左側壁では、6列4段、奥壁では1列2段の壁面構成である。扱い得る石材が大型化したわけであり、玄室幅・玄室高の拡大につながった。羨道から玄室にかけての天井面は依然として段を有さず、袖部の屈曲が、壁面上端寄りで解消されるのは、I段階と同様である。

II段階への推移は、構築技術上の発展（横穴式石室の定着）に基づく内的展開を基軸としているものと理解できる。なお、当段階には、TK10の型式的特徴を有する須恵器が伴う。

観音山古墳石室の画期性 「角閃石安山岩削石積石室」の成立がIII段階である。6世紀第3四半期から第4四半期にかけての時期に当たる。上毛野地域内にあって、当該石室は観音山古墳を中心とした小地域に限定的な石室形式である。これ以外の地域で、同時期どのような石室が築造されたのかは、前橋市大室古墳群の後二子古墳（前方後円墳、約85m）が一つの手掛かりになる。石室

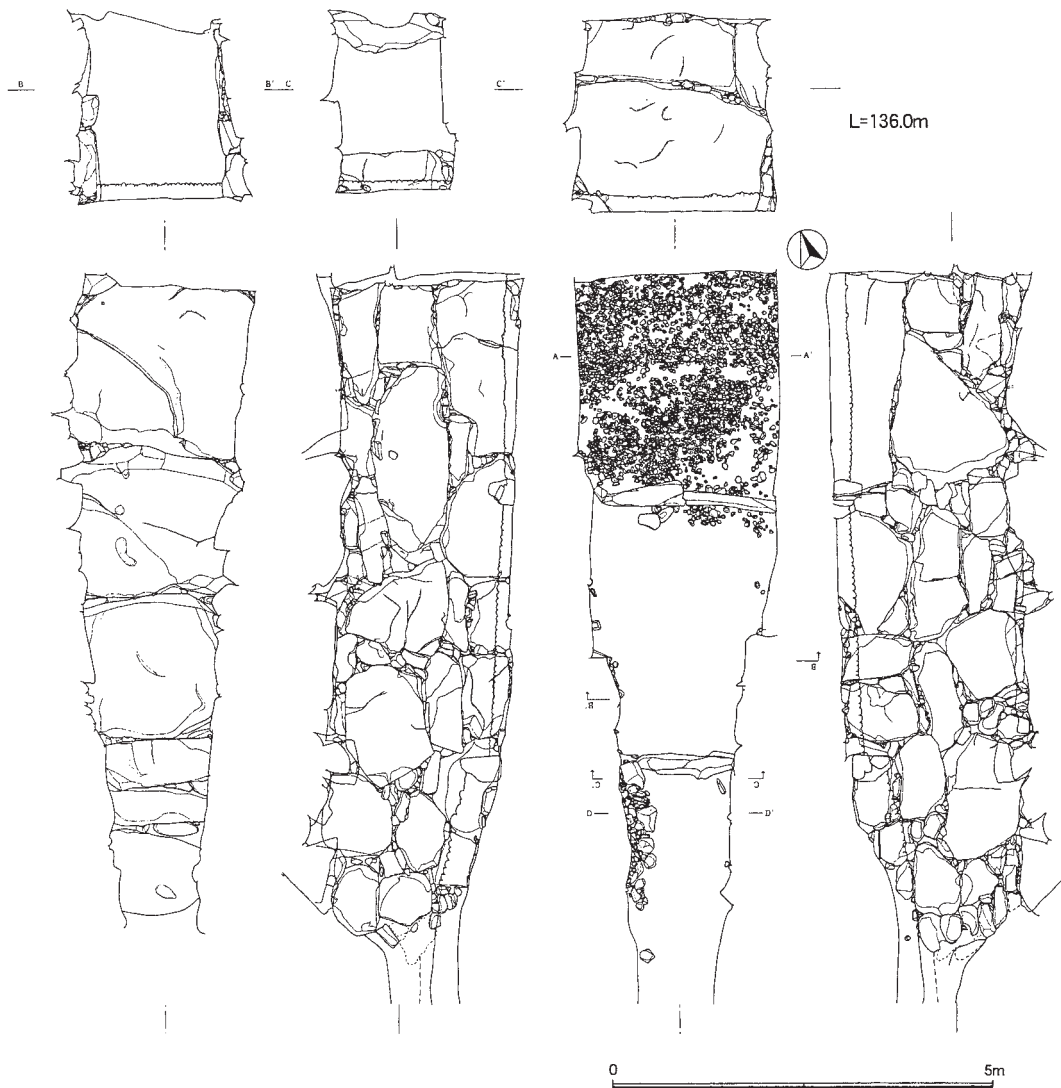


図6 後二子古墳石室実測図

全長 9.42m, 玄室長 4.82m, 同奥幅 2.65m, 高さ奥部で 2.20m, 羨道長 4.31m, 同奥幅 1.58m である。羨道と玄室で石室全長をほぼ折半している。本石室の最も顕著な特徴として、壁石使用石材のさらなる大型化がある。玄室左側壁では、4 列 3 段の構成で、奥壁では、壁面の 2/3 を単一石で占める 2 段構成である。Ⅱ段階からの自然な変化の方向性が見て取れるところである。

上毛野地域におけるⅡ段階からの推移、さらには同じⅢ段階の角閃石安山岩削石積石室以外の主要石室と比較すると、観音山古墳石室が、地域内において異質性を放っていることは明らかである。この段階の石室には、TK43 の型式的特徴を有する須恵器が伴う。

Ⅳ段階・巨石巨室横穴式石室の成立 Ⅳ段階は、6 世紀末葉ないし 7 世紀初頭を中心とした時期である。高崎市の観音塚古墳が代表的であり、巨石巨室構造の横穴式石室成立の段階である。石室全長 15.3m, 玄室長 7.1m, 同奥幅 3.4m, 同高 2.8m の規模である。長大な石室を羨道と玄室でほぼ折半する流れは、後二子古墳に同様である。玄室の壁面構成を見てみると、左側壁では、壁面の 2/3 以上を平積の巨石による基底石でカバーし、残りの上端部を奥行の長い大石の横積でカバーする。奥壁は壁面の大半を単一石の巨石基底石でカバーし、上端側は奥行き長い横積の巨石でカバーしている。

Ⅲ段階に位置づけた角閃石安山岩削石積石室の前後に当たるⅡ・Ⅳ段階、あるいは同じⅢ段階の観音山グループ以外の主要横穴式石室と比較検討してみると、当該石室の異質性、断絶性を具体的に把握できたかと思う。

2. 半島南部における横穴式石室と上毛野地域

観音山古墳石室の系譜検討を進める前に、上毛野地域の初現期横穴式石室の系譜関係について整理しておきたい。このことについては、慶尚南道南西部を中心とした地域との関係性について柳沢一男氏や小林孝秀氏が積極的に発言している〔柳沢 2001・2006・2014, 小林 2014〕。

前二子古墳石室の系譜関係 柳沢氏は、主として崇山江流域を中心とした半島南西部の 5 世紀末葉から 6 世紀前半の横穴式石室を九州系石室との系譜的關係から整理した。その中で、全羅南道海南長鼓峯古墳に代表される石室の特徴を細長い長方形玄室、石室内面に突出する玄門構造、狭長な羨道等とし、慶尚南道固城松鶴洞 1B 号墳 1 号石室、同泗川船津里古墳石室とともに「長鼓峯類型」として区分した。その上で、当類型の諸要素には、九州系石室の構造的特徴が反映しているものの、直接的な関係は、むしろ前橋市前二子古墳に見出せるとし、最近では、松鶴洞 1B 号墳 1 号石室の造墓工人（九州の複数系統の工人が渡航して関与したと推定）が上毛野地域にも出向いて築造に従事したと想定している〔柳沢 2001・2006・2014〕。

これに対して小林氏は、前二子古墳の系譜関係を九州、朝鮮半島の古墳動向の中で見ていく視点には賛意を示しつつも、長鼓峯類型とした半島の 3 古墳及び前二子古墳の同一類型化と系譜関係には疑問を呈している。類型化された半島の石室間で、長大とする羨道特徴は長鼓峯には当てはまるが、松鶴洞はさほどでないこと、細長方形の玄室平面形は、松鶴洞が目立って顕著である点等、相異点が随所に指摘できるからである。このことは、「中洞里 4 号墳石室類型」として整理されている〔洪 2001〕慶尚南道南西部を中心に数多く確認される在地色の強い一連の石室との関係性も視野に入れていく必要を指摘する。その上で、個々墳石室の詳細比較検討から導きだす具体的関係性摘

出は今後に期するとした上で、むしろ、長鼓峯類型と中洞里4号墳類型を大きく括った半島南西部地域に認められる細長方形石室と上毛野地域初現期石室の系譜関係の可能性確認から出発することを提唱している〔小林2008〕。

これらの先行研究を踏まえても、筆者は固城松鶴洞1B号墳1号石室と前二子古墳石室の関係は深く、直接に近いものであったのではないかと考えている。細長方形の玄室平面、玄門柱石、玄門部分の板石閉塞、羨道から玄室にかけての天井面の連続、壁面赤色顔料塗彩等に加えて、松鶴洞1B号墳1号石室で床面を除去すると全体に現れてくる板石を敷き詰めた基礎床構造は前二子古墳で確認されている板石敷き構造に通じるものである。前二子古墳の場合、これを使用時の床面と考えがちだが、明治年間の発掘時に床面下まできれいにさらったために、基礎面の板石敷きが露出しているわけで、松鶴洞1B号墳1号石室で床面の砂礫層を除去すると板石敷きが表れるのと全く同じである。これに加えて、側壁上端寄りに差し込まれていた専用の鉤状鉄製品も半島南部と日本列島における数少ない先駆例であるだけに特有の共通項として注意する必要がある。

ほぼ同時一斉に登場している上毛野地域の初現期横穴式石室の中において、独り前二子古墳石室については、早くから九州系石室との関係が指摘されてきたところである。玄門柱石、板状切石を組み合わせた仕切石による屍床部、石室入口の両側に最大面を外に向けて縦位に配する羨門構造(板石閉塞が推定される)、等々である。松鶴洞1B号墳1号石室に在地的な要素が認められるとしても、松鶴洞1B号墳1号石室・九州・上毛野という構造上の繋がりは肯定できるのではないだろうか。

加耶地域の横穴系墓制 繰り返しになるが、観音山古墳石室の最も顕著な特徴として、玄室長幅比1:2.65の細長い長方形平面(若干羽子板形を呈する)、玄室に比して羨道が極端に短い両袖式、壁面構成が両側・奥とも均質的な長方形石材による多石構成、等々が挙げられた。これらの特徴の淵源を他地域に求める際、前項で確認した初現期の前二子古墳石室の系譜が慶尚南道南西部の加耶地域に求められる点は、地域的歴史性の観点からも注意する必要がある。加えて、観音山古墳グループの副葬品に顕著に認められる半島南部との強い関係性等を踏まえると、構造的に類似する慶尚南道南西部の石室群の要素を取り込んで実現した可能性も想定されてくるところである。

加耶地域における本格的な横穴式石室の登場は、主として6世紀のこととされている。ところで、洛東江流域においては、竪穴式石槨の片方の小口部を開けた一種の横口式石室が、5世紀前半には確認されている。初期の事例として5世紀前半の慶尚北道昌寧校洞3号墳があり、引き続き流域一帯の古墳に採用されている。高句麗・百済における本格的な横穴系墓制の影響を受ける中で、在地色の強い竪穴系墓制の延長上で横穴系墓制の一部要素が採用されたと考えられている。

加耶地域に登場する横穴式石室は、その構造的な特徴から、大きく2つの相異なる石室形式として発現する〔曹2000、洪2001、吉井2002・2010〕。その一つは、慶尚南道固城・泗川・晋州・宜寧・咸安などの南海岸及び南江流域を中心に分布しているもので、玄室が細長い長方形平面を呈し、両袖式であること、両側・奥壁とも均質に近い多石構成であり、さらに玄室長に比して羨道長が大幅に短いこと、天井面は平天井で、側壁が直線的に内傾する点等を顕著な特徴としている。宜寧郡中洞里4号墳が代表的石室の一つであることから「中洞里4号墳型」と呼称されることもある〔洪2001〕。

この石室形式は、石室内の利用形態や副葬品の構成は多様であるが、石室自体は、非常に均質な

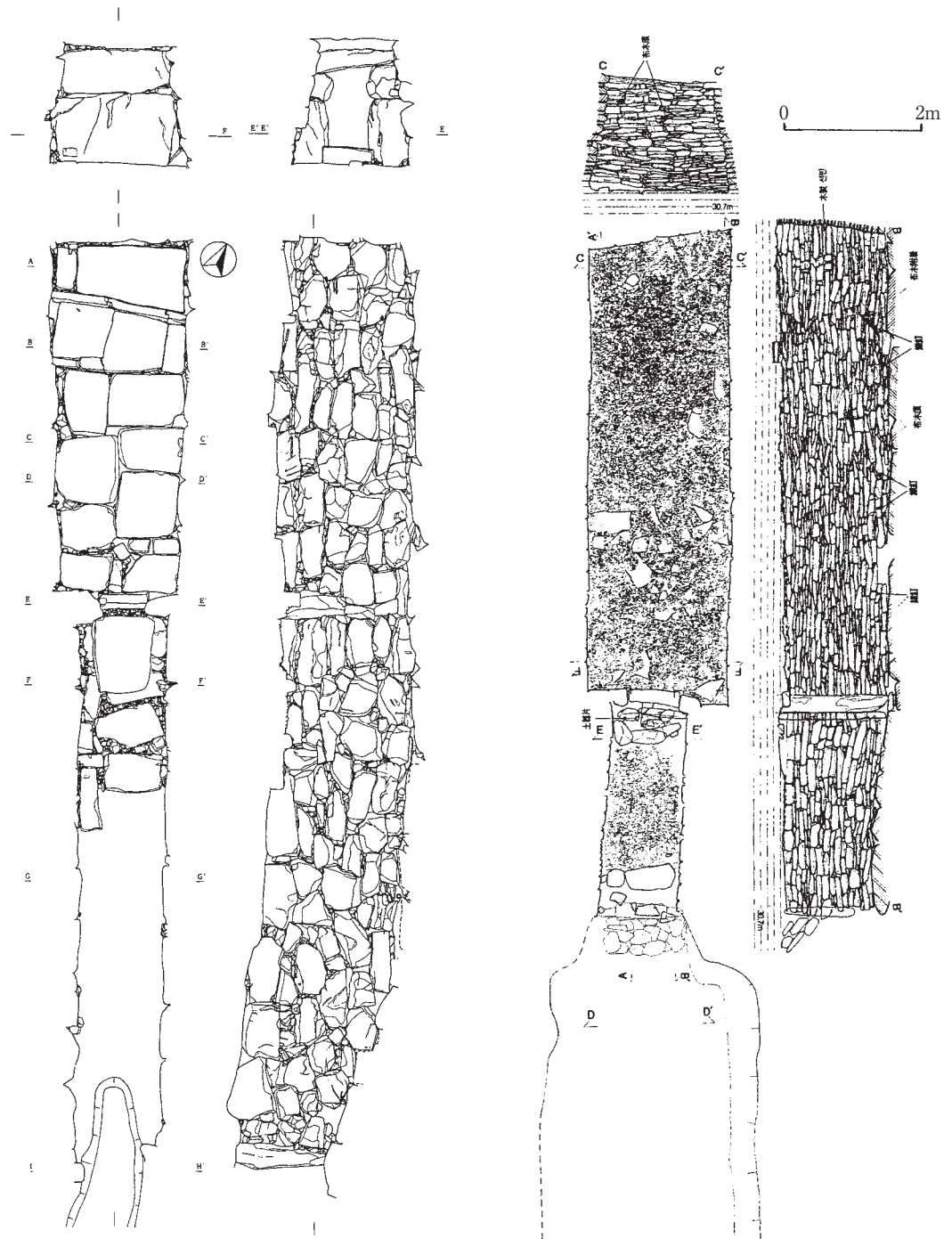


图7 前二子古墳と固城松鶴洞 1B号墳 1号石室

内容を備えており、共通した設計企画・構築原理に基づいていることが考えられる。宜寧中洞里4号墳に加えて、固城内山里34・60・64号墳、固城蓮塘里18・20号墳、晋州水精峯2・3号墳、咸安道項里4・5号墳等が主なものとして挙げられる。これらについては、出土遺物等の検討も踏まえ、6世紀前半～中葉の所産と考えられている〔定森・吉井・内田1990〕。

もう一つは、大加耶の中枢域である内陸部に入った慶尚北道高霊・慶尚南道陝川地域を中心に分布する。高霊古衙洞壁画古墳に代表されるもので、玄室平面が方形に近い長方形で、長さは羨道が玄室を若干凌駕する。羨道は奥に向かって右側に偏する右片袖式である。「古衙洞壁画古墳型」とも呼称される〔洪2001〕。

これらのうち、後者はこの時期の百済の直接的影響下に成立したと考えられている。これに対して、前者は、在地伝統となってきた竪穴式石槨に通ずるところから、これと羨道が合体して成立したとする理解も示されている。もちろん、この時期の半島南部の状勢を踏まえると、百済横穴式墓制の強い影響を受けて成立にいたっていることは間違いないところである〔曹2000、山本2001、洪2001、吉井2002・2010、小林2008〕。

なお、これらとは別に、九州系横穴式石室との関係性の中で成立していると考えられる「倭系石室」とも称されているものが、点々と認められる。地域的には、中洞里型の分布域より狭い範囲だが、重なるような分布傾向を示している。関行丸式石室と繋がる巨済長木古墳、胴張り平面で、コの字形の屍床部と石柵を有する宜寧雲谷里1号墳、両袖式の長方形玄室で石屋形を有する宜寧景山里1号墳が代表的事例である。柳沢氏はこれに長鼓峯類型も合わせ、九州の造墓工人が渡って築造した「移植型」石室として整理している〔柳沢2006〕。

これらの中で、観音山古墳石室との関係性が推測されるのは、中洞里4号墳型石室である。

中洞里4号墳型石室をめぐって 中洞里4号墳は、慶尚南道宜寧郡の南江右岸に所在する中洞里古墳群に属している。直径は、南北で約13.1m、高さ約2.5mの円墳で、石室は南に開口する半地下式の構造を取っている。外からは、羨道前に1.85×1.34mの楕円形状に穿たれた墓道状構造から約1m下り込むように入室する。この墓道状構造を中心に取り込むような関係で、石室入口部の左右幅約3mでハの字形を呈する前庭状構造が認められる。

石室は、玄室長4.65m、同幅1.5m、同高2.4mの規模で、これに奥幅0.73m、長さ1.22m、高さ1.63mの羨道が取り付く。壁面は奥・側壁とも小振りの割石による多石構成である。天井石には、奥行きのない板状石材を何石も連なる特徴がある。

ところで、前に挙げた同類型の諸石室は、石室が有する構造的諸特徴、規模をほとんど共通にしている。明確な一類型石室形式として、一定地域に定着していたと考えていいだろう。1910年に調査された水精峯2・3号墳は、石室入口周辺の調査が不十分であるが、他は酷似していることから、未確認部分も同一であったと考えられる。

観音山古墳との関係でみると、天井部の段構造は異なるが、両袖式で細長方形の玄室、玄室に比べて大幅に短い羨道、玄室の奥・側壁の多石構成等を共通項として指摘できる。加えて、観音山古墳の場合も石室入口前に特別な盛土面の広がり及び前庭入口ポイントの表示と思われる2石の配置等から奥行き5.35m、奥幅2m、前幅6mほどの前庭状空間が造作されていたことが想定されている。当地域にあっては、前庭状施設の先駆的事例である。

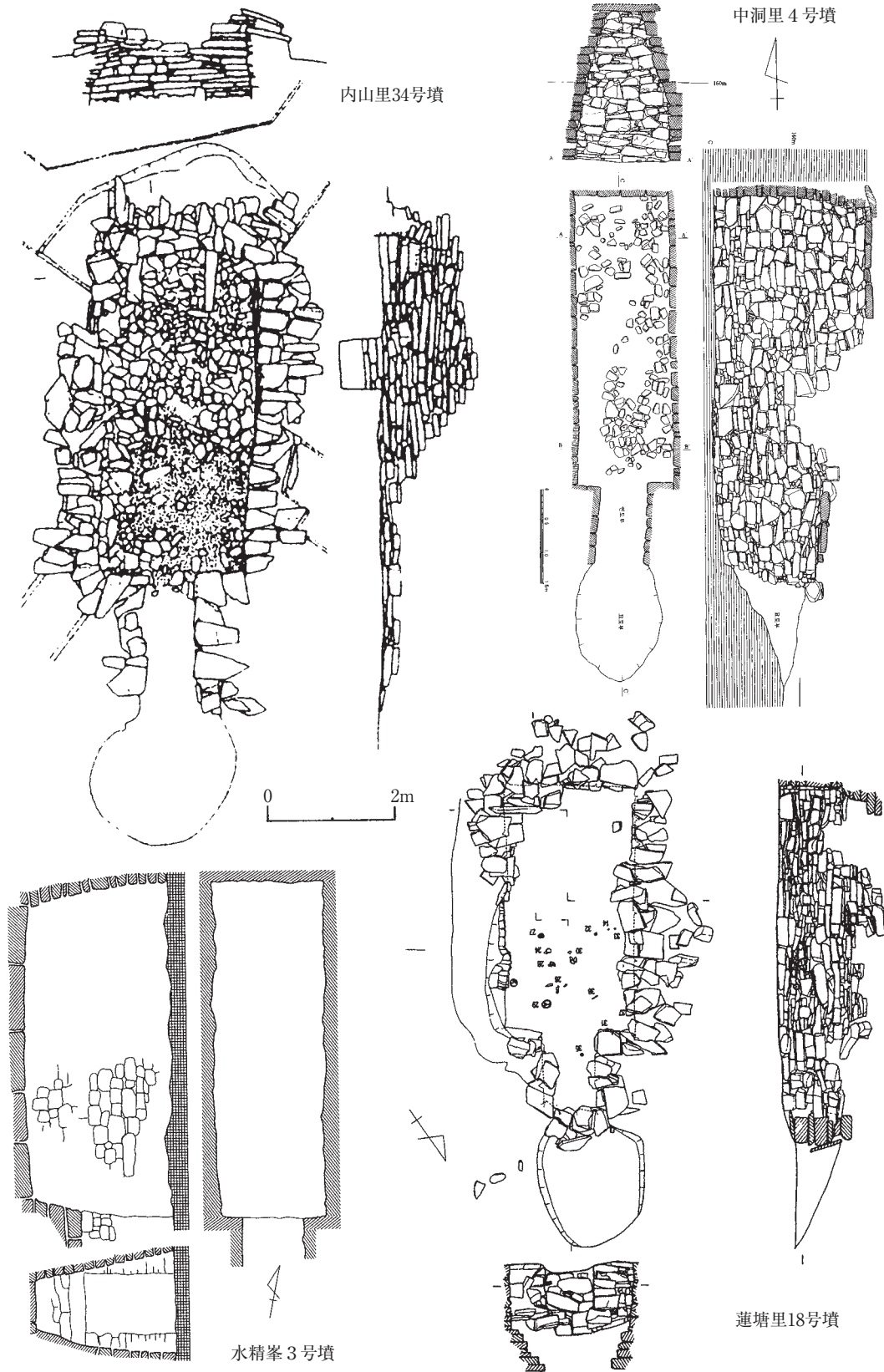


図8 中洞里4号墳型石室の諸例

観音山古墳石室の場合、中洞里4号墳型石室に特化した中で直接的な構築技術的系譜関係を想定できるかは、断言はむずかしい。しかし、この類型石室の顕著な石室構成要素を採用している可能性は十分あるものと思われる。

おわりに

観音山古墳を中心とした角閃石安山岩削石積石室に対して、この特徴的な石室構造の系譜について慶尚南道南西部を中心とした地域に求めてみた。おそらく、上毛野地域における石室構築技術の延長上で完結できるとする反論も承知の上である。

観音山古墳及び観音山グループの古墳の副葬品に認められる顕著な半島色が、この古墳の勢力及びその政治的同盟グループが保持してきていた朝鮮半島南部地域との強い結びつき・交流の所産と考えている。このことは、観音山古墳の時期に限ったことではなく、上毛野地域の地域的伝統性・歴史性を受け継いだものと考えられる。

上毛野地域は、東国の中にあつては、5世紀第2四半期には馬が移入され、生産が開始された可能性が高崎市剣崎長瀬西遺跡や甘楽郡甘楽町西大山遺跡1号墳等の諸遺構の様相から明らかになってきており、合わせてこれに関与した渡来系の人々の存在が明らかになりつつある。その場合、出土遺物の特徴から加耶との関係が取り分け見えてくるところである〔群馬県立歴史博物館2017〕。一方、5世紀第3四半期の井出二子山古墳の主体部から出土したおびただしい量の副葬品残片からは、f字形鏡板・剣菱形杏葉をはじめとする金銅製品が確認され、加耶との関係性の深さが指摘されている〔高崎市教育委員会2009〕。5世紀第3四半期からの渋川市金井遺跡群（金井東裏遺跡・金井下新田遺跡）では、組織的で大規模な馬生産の展開と渡来系の人々の深い関わりが明らかになりつつある。

加えて、当地域に直接関わりとされてきている上毛野氏の朝鮮半島との交渉に深く関与している伝承も、少なくとも考古資料からうかがえる顕著な地域動向と齟齬を来すものではない。このような地域的歴史性を見据えた時、前二子古墳石室が固城松鶴洞1B号墳1号石室につながる地域的前提・背景が十分用意されていたと言えるのではないだろうか。

前二子古墳石室に認められた九州・半島南西部の繋がりには、交流上の基本的道筋として理解している。もちろん、上毛野地域勢力が独自に半島南部との交流を展開していたわけではなかったろう。観音山古墳の勢力は、6世紀に入り益々深まっていったヤマト王権と半島南部の諸王権・勢力との交流展開に基本的には加わりつつ、併せて独自の交流の道筋も模索したのではなかろうか〔高田2014, 2017〕。

観音山古墳及び観音山グループが、目立って新羅系を中心とした諸文物を入手した背景には、6世紀後半における大加耶の滅亡、新羅・百済の対立顕在化の中で、ヤマト王権と新羅王権が新たな関係模索に入っていた結果、新羅系文物が目立って王権にもたらされる動きが想定されている〔朴2007, 土生田2010〕。しかし、これら新羅系文物の列島における偏在性、文物内容の多様性を踏まえると、新羅王権→ヤマト王権→地域勢力の図式のみでは収まりきらない側面も有していると考えるところである。観音山グループ側の入手への強い意図が作用した積年の希求の側面も考慮する必

要がある。

観音山古墳の造墓活動には、埴輪表飾、規模・構造において革新性を帯びた石室づくり、新羅系文物をはじめとする様々な意味合い・希少性を語る副葬品群、等々に自らの立脚点を指し示そうとする積極的意図が読み取れるところである。その一環として、固有の朝鮮半島との深い関係性・立脚点を石室構造にも示そうとしたのではなかろうか。

本稿を草するに際して、本共同研究のメンバーの諸氏に加えて、下記の方々から多くの御支援・御教示を受けることができた。記して感謝申し上げる次第である。(敬称略、順不同)

曹永鉉 成正鏞 洪潛植 金武重 沈炫暉 金跳咏 徳江秀夫 深澤敦仁

参考文献

(日本語)

- 秋池 武 2000「利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義」『群馬県立歴史博物館研究紀要』21
安中市教育委員会 2016『安中市指定史跡 築瀬二子塚古墳整備事業報告書』
伊勢崎市教育委員会 2010『阿弥陀古墳』
内山敏行 2011「毛野地域における6世紀の渡来系遺物」『古墳時代毛野の実像』雄山閣
太田博之 2013「東日本における古墳時代後期の朝鮮半島系遺物と首長層の動向」『国立歴史民俗博物館研究報告』179 国立歴史民俗博物館
尾崎喜左雄 1966『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
群馬県教育委員会 1982『史跡観音山古墳』
群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会 1998『綿貫観音山古墳Ⅰ 墳丘・埴輪編』, 同 1999『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』
群馬県立歴史博物館 2017『海を渡って来た馬文化』
小林孝秀 2008「関東における横穴式石室の動向とその特質」『生産の考古学』Ⅱ 倉田芳郎先生追悼論文集刊行委員会編 同成社。後に小林孝秀 2014『横穴式石室と東国社会の原像』雄山閣
沢口 宏 2000『利根川東遷』上毛新聞社
定森秀夫・吉井秀夫・内田好昭 1990「韓国慶尚南道晋州水精峯2号墳・玉峯7号墳出土遺物」『朱雀』3 京都文化博物館
高崎市教育委員会 1997『高崎情報団地遺跡』
高田貫太 2014『古墳時代の日朝関係』吉川弘文館
高田貫太 2017『海の向こうから見た倭国』講談社
玉村町教育委員会 1993『小泉大塚越遺跡』
玉村町教育委員会 2006『小泉長塚遺跡』
玉村町教育委員会 2007『砂町遺跡ほか』
玉村町教育委員会 2009『川井・茂木古墳群』
曹永鉉 2000「新羅・加耶の横口・横穴式石室墳」『考古学ジャーナル』No461 ニューサイエンス社
塚越甲子郎・柳沢一男ほか 2002・2003「倉賀野東古墳群大道南群調査報告」『高崎市史研究』15・16・17号 高崎市
辻田淳一郎 2018『同型鏡と倭の五王の時代』同成社
徳江秀夫 1992「上野地域における装飾大刀の基礎調査」『研究紀要』10 群馬県埋蔵文化財調査事業団
東京国立博物館 1983『東京国立博物館図版目録 古墳遺物編(関東Ⅱ)』
朴天秀 2007『加耶と倭』講談社
土生田純之 2010「古墳時代における西毛(群馬県西部)の渡来系文物」『国立歴史民俗博物館研究報告』158 集
洪潛植 2001「加耶の墳墓」『東アジアと日本の考古学』Ⅰ 同成社
洪潛植 2009「韓半島南部地域の九州系横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店
前橋市教育委員会 1981『金冠塚(山王二子山)古墳調査概報』
前橋市教育委員会 1993『前二子古墳』
前橋市教育委員会 2005『大室古墳群』

- 右島和夫 1985「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」『群馬県史研究』22
- 右島和夫 1993「角閃石安山岩削石積石室の成立とその背景」『古文化談叢』30下。後に右島『東国古墳時代の研究』学生社1994所収
- 右島和夫 1994「上野地域における横穴式石室の変遷」『東国古墳時代の研究』学生社
- 右島和夫 2008a「古墳時代の畿内と東国」『研究紀要』13集 由良大和古代文化研究会
- 右島和夫 2008b「小泉古墳群の冠について」「小泉古墳群とその時代」『小泉大塚越3号墳と小泉長塚1号墳』玉村町教育委員会
- 右島和夫 2011a「観音山古墳とその周辺」『勝部明生先生喜寿記念論文集』
- 右島和夫 2011b「横穴式石室の鉤状鉄製品」『古文化談叢』65集
- 宮田裕紀枝 1989「総括一道明山古墳・舟山古墳・筑波山古墳について一」『板倉町史 考古資料編 別巻9』板倉町史編さん委員会
- 柳沢一男 2001「全南地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』179号。後に『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会編 同成社に所収。
- 柳沢一男 2006「5, 6世紀の韓半島西南部と九州」『加耶, 洛東江에서 栄山江으로』第12回加耶史国際学術会議 金海市
- 柳沢一男 2014「前二子古墳横穴式石室のルーツを探る—九州と韓国の横穴式石室—」『東アジアから見た前二子古墳記録集・資料集』群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会
- 矢野和之 1982「石室崩壊時期の検討」『史跡観音山古墳』群馬県教育委員会
- 吉井秀夫 2002「朝鮮の墳墓と日本の古墳文化」『日本の時代史2 倭国と東アジア』鈴木靖民編 吉川弘文館
- 吉井秀夫 2004「考古資料から見た朝鮮諸国と倭」『国立歴史民俗博物館研究報告』110
- 吉井秀夫 2008「横穴系墓制を通してみた6世紀の加耶と周辺諸国」『6世紀代 加耶と 周辺諸国』第14回加耶史国際学術会議 金海市
- 吉井秀夫 2010『古代朝鮮 墳墓にみる国家形成』京都大学学術出版会 (韓国語)
- 国立昌原文化財研究所 2005『固城内村里古墳群Ⅱ』
- 国立昌原文化財研究所 1999『咸安道項里古墳群Ⅱ』
- 慶尚大学校博物館 1994『宜寧中洞里古墳群』
- 慶尚大学校博物館 2004『宜寧景山里古墳群』
- 慶尚大学校博物館 2000『宜寧雲谷里古墳群』
- 慶南大学校博物館 1994『固城蓮塘里古墳群』
- 東亜大学校博物館 2005『固城松鶴洞古墳群』
- 啓明大学校博物館 1984『高霊古衙洞壁画古墳実測調査報告』
- 山本孝文 2001「伽耶地域 横穴式石室의 出現背景」『百濟研究』34

図版等典拠

- 図1・2：群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか1999文献
- 図3：右島2011a文献
- 図4：右島「利根川中流域における6世紀後半の前方後円墳」『阿弥陀古墳』伊勢崎市教育委員会2010
- 図5：右島「観音塚古墳の構造的特徴と巨石搬入ルートの検討」『改訂版 観音塚古墳の世界』観音塚考古資料館2015
- 図6：前橋市教育委員会『後二子古墳・小二子古墳』1992
- 図7：前橋市教育委員会1993・東亜大学校博物館2005文献
- 図8：国立昌原文化財研究所2005・慶尚大学校博物館1994・慶南大学校博物館1994文献、及び定森・吉井・内田1990文献
- 図9：上半4葉は筆者撮影、下半4葉は、群馬県立歴史博物館提供（文化庁保管）
- 図10：不二山古墳は群馬大学提供、山王金冠塚古墳遺物は、東京国立博物館提供、小泉大塚越3号・小泉長塚1号は玉村町教育委員会提供

(群馬県立歴史博物館、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018年5月24日受付, 2018年12月10日審査終了)

The Watanuki Kannonyama Mound and the Korean Peninsula

MIGISHIMA Kazuo

The Watanuki Kannonyama Tumulus in Takasaki City, Gunma Prefecture, well-known throughout the country, is a keyhole-shaped tumulus typical of the Kanto region during the second half of the sixth century. Since 1968, a series of excavations have revealed abundant, well-preserved luxurious burial treasures in the horizontal stone chamber in the rear circle. The contents suggest a strong relationship with the Korean Peninsula (especially, with the Baekje, Silla, and Gaya regions in the south), and they are an excellent group of artifacts that could have only been created by highly skilled artisans. We can imagine a deep connection between the tumulus and the people of the Korean Peninsula involved with it.

There has been a great deal of interest in the burial treasure found in the stone chamber. However, there have not been many opportunities to examine the genealogical aspects of the stone chamber and the background of the construction since the research has not gone beyond the identification of the chamber's structural features. In this paper, I have placed these issues as the central subject.

The horizontal stone chamber of the Kannonyama Mound is from the transitional period of horizontal stone chambers starting around the late fifth century/early sixth century in the Kamitsukeno region, and it is notable for its heterogeneous and unique features. Its main construction material is hornblende andesite, erupted from the Haruna volcano in the second quarter of the sixth century, and it has been called a "hornblende andesite stone chamber masonry laid with cur rocks" (Ozaki, 1966; Migishima, 1993). The stone chamber is not limited to the Kannonyama Mound; we can also find numerous stone chambers in the chief tumuli in the surrounding areas. Moreover, we can see remarkable evidence of the colors of the Korean Peninsula in the burial treasure of each tumulus. One example is the Sanno Gold Crown Tumulus in Maebashi City from which a Sillan-made gold-copper crown was excavated. We can assume that there is a strong connection among these tumuli around the Kannonyama Mound.

The direct relationship between the Kamitsukeno region and the Korean Peninsula dates back to the fifth century (Gunma Prefectural Museum of History, 2017). It is known that many foreigners were welcomed in the region, and they were involved in activities such as organized horse breeding. The hosts were the chieftains of the central and western part of the region. There are many artifacts made

with the leading technologies from Gaya and Silla among the burial treasure of the Ide Futagoyama (or twin peaks) Mound, which became the beginning of the formation of a group of the Baekje mounds.

Moreover, there is evidence of a direct relationship between the horizontal stone chamber of the Maefutago Mound in Maebashi City and the stone chamber no. 1 of the Goseong-gun Songhak-dong 1 B in western Gaya. Such a relationship between the two regions is significant. When taking into account the archaeological and historical circumstances surrounding the Kannonyama Mound, we can see a strong affinity between its horizontal stone chamber and those in the southwest Gaya region. It is possible to explore the background of the establishment of the relationship from its connection with the south of the Peninsula concerning the various elements that form the Kannonyama Mound.

Key words: Kamitsukeno region, Korean Peninsula, Watanuki Kannonyama Mound, Korean-type burial treasure, hornblende andesite stone chamber masonry laid with cur rocks, old Tosando routes, Western Gaya



観音山古墳墳丘を南西から望む



玄室奥を望む



羨道から玄室にかけての左側壁



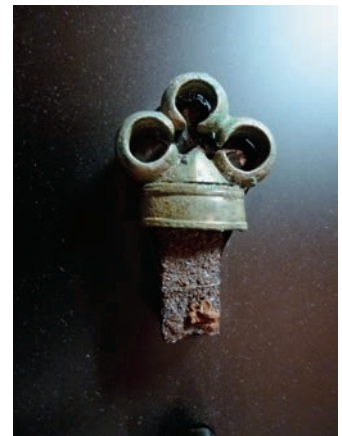
玄室から羨道を望む



金銅製心葉形透彫杏葉



鉄製突起付冑



銅製三累環頭大刀



金銅製歩揺付飾金具

図9 観音山古墳の墳丘・石室と副葬品



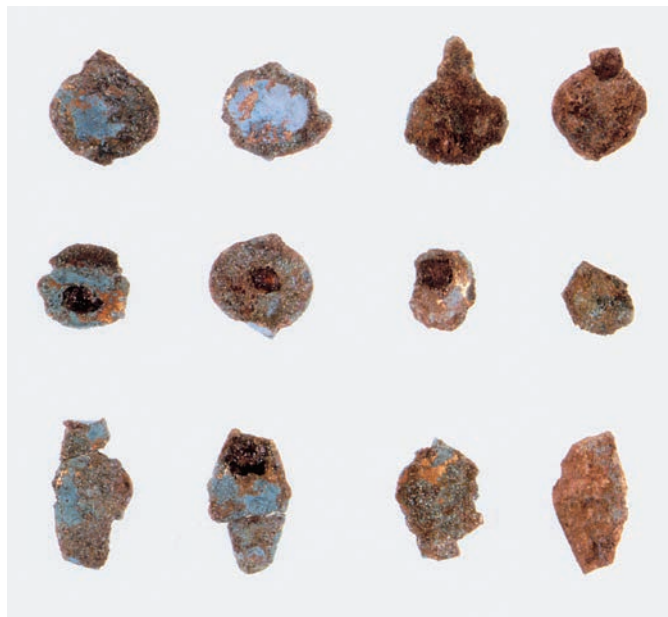
不二山古墳 金銅製透彫冠片



不二山古墳の横穴式石室 羨道入口から奥を望む



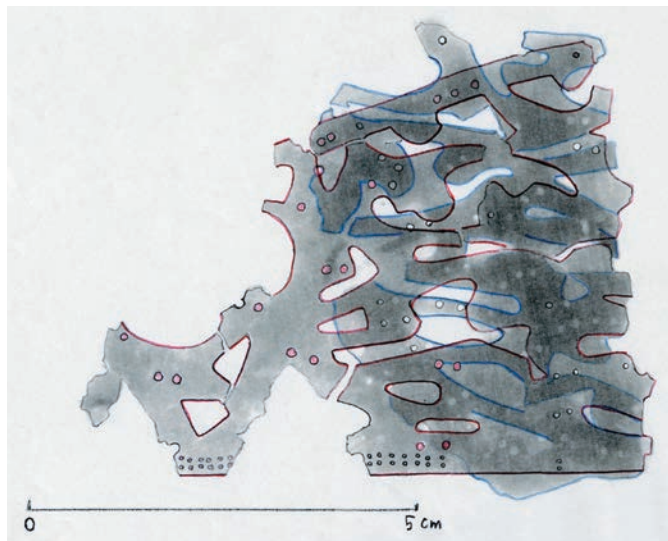
山王金冠塚古墳 金銅冠



小泉大塚越3号墳 出字式冠が推定される金銅片



小泉長塚1号墳 金銅単鳳環頭大刀



小泉長塚1号墳 金銅冠が推定される透彫破片X線写真

図 10 角閃石安山岩削石積石室の石室と副葬品